

昆陽池におけるカワウ個体数管理への取り組みについて

伊丹市みどり環境部みどり室みどり課 高津 一男

1. はじめに

近年、昆陽池のカワウコロニーには1年を通して約2,000羽が生息している。繁殖数は年々増加し、2004年には450巣を越えた。04年3月から水質浄化対策の一環として、池底に堆積した汚泥を取り除く浚渫工事を実施しており、工事で島の一部で樹木を伐採・整地を行ったため、個体数は例年より2割程度少なめで推移している。その一方で営巣数は急増し、05年には800巣を越えている。

伊丹市では01年3月から個体数及び営巣数調査を月1回程度継続的に実施し、00年11~12月には営巣樹木調査、02及び03年に擬卵による繁殖抑制実験を実施した。今回は擬卵による繁殖抑制実験結果と昆陽池における今後のカワウ管理の考え方について述べたい。



昆陽池公園の航空写真
(2003年3月12日撮影)



浚渫工事中の昆陽池公園

2. 擬卵による繁殖抑制実験結果

02年ではカワウが擬卵を抱卵し、最長では100日以上を抱卵していたことが確認された。擬卵の材料を石膏・紙粘土・木（既製品）と変えてみたが、目視調査では全ての巣で抱卵が確認され、材料による差異は認められなかった。材料としては、鑄型を作ることで大量かつ精巧にできる石膏が有効であった。また、2巣については産卵が止まるまで繰り返し採卵を続けたところ、どちらも総産卵数が13個で、カワウは多数の産卵が可能であることが確認された。擬卵回収率は46%と低く、繁殖抑制効果については確認できなかった。これは擬卵調査等で数回に渡り、島へ人が立ち入ったことが大きいと考えられた。人が近づくと親鳥が飛び立ち、その隙を見てカラスが卵を盗む行動が頻繁に確認され、中には間違っ​​て擬卵を盗む様子も目撃された。また、樹木が密生しており、フィールドスコープによる目視調査では擬卵設置後に巣が増えることで巣が重なって見えたり、茂った枝葉で見えなくなったりと時間が経過するに伴い、確認できなくなった。そのため、03年では調査区域を限定、事前に樹木の間伐を実施して区域内の巣すべてに擬卵を設置するとともに、人為的な攪乱を避けるため、その後の立ち入り調査を行わないこととした。1月末に間伐を実施、3月4日に調査区域にあった32巣すべてに4個ずつ擬卵を設置した。6月11日に擬卵を回収、その時、17巣には4個、2巣には3個の擬卵が残っており、かつヒナが育っていないことが確認された。地上に落下していた擬卵を含めた回収率は78%と前回を大きく上回った。しかし、擬卵設置後も調査区域内で営巣数は増加し、4月16日には擬卵を設置した巣を含め、最高90巣まで増加した。



置き換え作業風景

3. 昆陽池における今後のカワウ管理

実験結果から擬卵による繁殖抑制の可能性が認められたが、擬卵の設置適期の見極めや設置後の人為的攪乱を避けることが必要であり、増えすぎた繁殖数を擬卵だけで抑制することは難しく、また、長距離を移動するカワウを一繁殖地だけで個体数をコントロールすることは困難である。しかし、増えすぎたカワウの活動によって、幹肌が白くなり、立枯れしている樹木の増加をはじめ、カワウが大集団でいることが公園景観上の問題となっており、さらには池の水質悪化や飛来するカモ類の個体数の激減など生態系への影響も懸念されている。

そのため、伊丹市では浚渫工事で行う野鳥の島の掘削整形に併せて立枯れや営巣の影響を受けている樹木を間伐し、ある程度、個体数や繁殖数を減少させた上で、野鳥の島の植生管理や擬卵の設置などを必要に応じて実施することで今後、適正な個体数及び繁殖数の維持管理ができるよう調査・検討していきたい。

しかし、閉鎖性水域であるため池でカワウコロニーの保護管理を確立するためには、日々排出される糞尿による急速な水質悪化への対策が不可欠となる。特に昆陽池のカワウは猪名川や武庫川の河口付近で採餌しており、外部から大量の窒素・リンを運ぶことで池の富栄養化に大きな影響を与えていることは明確である。閉鎖性水域であり、内部生産だけでも富栄養化が進行する昆陽池では浚渫をはじめ、導水による池水の管理等の水質浄化対策を検討・実施しているが、費用や水源には限界があり、その上、カワウの外部負荷を抱え続けることは厳しいものがある。

カワウの保護・管理に広域的な取り組みが必要不可欠なのと同様に繁殖地を抱える地域への水質をはじめ、水辺環境保全のための広域的な対策が望まれる。